



学校だより

第66号 平成24年9月24日

キャリア教育 (10)

副校長 渡邊昭宏

「これやってくれる人」「はい!」「じゃお願いね」。しかしいつまでたっても「終わりました」の報告がありません。見に行ってみると……。こういうタイプのお子さんは何でも引き受けるというか断りきれないという優しい性格といえるかも知れませんが、見方を変えると自分の実力や限界がわかっていないともいえます。小さい頃からできたことだけを褒められ、できないことに対しては叱咤激励ばかりされていると、「できません」「無理です」と言い出しにくくなってしまいます。お子さんが「わからなくなっちゃった」「やってみただけで難しくて」「失敗しちゃった」と言ってきたときに、まずは「よく正直に言えたね」と受け止めてあげることがキャリア教育ではとても大事なことです。

「自己理解」とはある意味で「自分の実力、限界、適性を知る」ことですから、まずはやってみないことには始まりません。10分間で何周走れるか、この水溜りを飛び越せるか、この漢字が読めるか、この計算ができるかといったすぐに答え(結果)や練習の成果がでるものから始めるとわかりやすいと思います。最終的には自分は何に向いているのか、どんな服が似合うのかといった個性に関する正解がないものもわかるようになるのが「自分を理解」ということですが、その時に役立つのが他人の目(評価)と他者との違い(比較)です。とにかくやってみて「振り返る」というサイクルを繰り返しながら人は成長(キャリア発達)し、次第に「自分」というものがわかってくるのです。

話は変わりますが、「きついです」「つらいです」「もう歩けません」「疲れました」といった逃避的・消極的な言葉を私たちはお子さんにいつ教えたのでしょうか。おそらくこうした発言や態度に対して学校や家庭は否定的です。しかし時と場合には「食べ残すこと」「我慢しないこと」「引き返すこと」「あきらめること」といったことが命を守る重要な決断になることもあります。しかし「残すな」「我慢しろ」「急げ」「頑張れ」と言われ続けていると大事な場面で切り替えができなくなります。時として「弱音を吐ける」ことも必要です。その場合にそれを受け止めてくれる雰囲気や人間関係が存在していれば、心も身体も壊わさないで済むのです。卒業後に企業就労する場合は特に教えてあげてください。

弱音を吐ける「自己理解」ができてくると他者を気遣う・思いやる、相手の立場に立つといった「他者理解」ができてきます。「自分ができるんだから相手もできて当然」「一度できたら何度やってもうまくいく」ではなく「一生懸命やってもできない人もいる」「誰でも苦手なことがある」「調子が悪いときはできないこともある」といったことが思えるようになります。真の優しさは挫折や失敗を経験するなかで生まれます。寄り道、回り道であっても人はそのなかで必ず何かを学び「生きる力(キャリア)」にしていきます。寄り添ってあげたり待ったりしてあげられる心と時間のゆとりをもつことが支援のポイントです。